

二〇二二年六月二日

豆腐屋のラッパ近づく昼寝覚
稜線かはた薄雲か走り梅雨
南朝の溪吹きあぐる青葉風
婆様の杖ともなりて避暑散步
獣害の電柵越しに夏薊
胸元に蜘蛛の囀纏ふ坑夫像
二〇二二年六月一日

一陣の風に散華や大牡丹
堂涼し豊かに笑まふ伎芸天
せせらぎをさかのぼりゆく糸とんぼ
渋滞の車列を洗ふ大夕立
西郷像遠まなざしの涼しさよ
売れ残る大根は細し道の駅
はたた神潜んでいそう峯の雲
おしゃべりの輪にまとひつく藪蚊かな
夕薄暑磯の香匂ふ無人駅
二〇二二年五月三十一日

夏草やサーカスの象出番待ち
退院の夫に新茶の封を切る
水馬真白き雲を踏んまへし
緑陰の万葉歌碑や誦しもして
蛙の草踏めばとびだす蛙かな
但馬路の峠はいまし麦の秋
部屋中に香を満ちさせて梅漬くる
黄金波打つ播磨路の麦の秋
句ともがら薔薇のベンチに句会かな
二〇二二年五月三〇日

朴の花真下に見ゆる天守かな
小判草入山料は竹筒へ
香水の一人加はり昇降機
故郷の匂ひの新茶とどきけり

さつき
とううち
菜々
三刀
うつき
よし女
百合
有香
せいじ
なつき
百合
ぼんこ
よし子
よし女
うつき
ぼんこ
うつき
よし子
わかし
よし子
雅子
はく子
わかし
きづな
雅流
きづな
うつき
有香

さ緑の水の広がる植田かな
竹籠の一輪挿しに十字花
潮引きて縦横無尽蟹の穴
古町の低き軒端や燕の子
風渡る植田は墳を要とす
二〇二二年五月二十九日

浜薄暑入り日を返す倉庫群
むらさきに昏るる丹波路茄子の花
日傘つと嫌いな人へ傾けて
背伸びして届く高さや袋掛け
はたたがみ昼暗くして居座れり
湧水が吾を呼びをる薄暑かな
一雨に艶を深めし若楓
生駒嶺に片足かけて虹ふとし
一散に駆け込む軒やはたた神
二〇二二年五月二十八日

忌を修す植田明りへ仏間開け
燕の巣売り家の軒をはばからず
画展へと一駅歩く薄暑かな
茅花流し牧草ロール点々と
土辣蕪真珠のごとく洗ひ上げ
二〇二二年五月二十七日

花棟ま青き空を烟らせて
開き初む亡き子の植ゑし京鹿子
もこもこと山膨らませ椎の花
青嶺また青嶺と畳む但馬路
樹下涼し日の斑の頁繰りにけり
溪声に和してさゆるる鴨足草
立ち話して溝浚へはかどらず

こすもす
三刀
よし女
はく子
なつき

うつき
菜々
きづな
こすもす
満天
とううち
宏虎
はく子
せいじ

菜々
三刀
よし子
こすもす
きづな

うつき
あさこ
ひかり
わかば
さつき
菜々
きづな

毎句会みのる選・二〇二二年六月四日